私たちが創りたい社会、これからの教育

未来を担う若者たちは、どのような社会を創りたいと思っているのだろうか。
そして、彼らが望む社会を実現する上で、学校教育はどうあるとよいのか。
3人の若者が、それぞれの創りたい社会と、教育に望むことについて、識者と語り合った。
さらに、次代の高校現場を牽引する若手・中堅教師が、これからの教育のあり方を、話し合った。

創りたい社会と教育への思いを語った3人の若者

千葉県・私立渋谷教育学園
幕張中学校高校卒業
立崎乃衣（たつざきのい）

福島県立
福島高校3年生
伊関佳純（いせきかすみ）

内閣府認定特区高等学校
明蓬館（めいほうかん）高校 岐阜SNEC 3年生
清水陸志（りくし）

若者たちの言葉に耳を傾け、教育のこれからを考えた3人の教育者

学習院大学文学部教授、
中央教育審議会委員
秋田喜代美

3人の若者との対話▶▶▶ P.8

静岡県立小山（おやま）高校
美那川雄一（みながわ）

静岡県立静岡東高校
神谷隼基（かみやとしき）

対談▶▶▶ P.16

若者たちの紹介――未来を担う3人が歩んできた道のり

エンジニア思考でコロナ禍に向き合い、「世界を変える10人」に選出

立崎乃衣（たつざきのい）

小学3年生からロボット製作に没頭し、中学1年生からは中高生で構成されるロボコンチームに参加。世界大会への参加を重ねてきたが、2020年3月から続いたコロナ禍においては、活動や登校ができない日々が続いた。そこで、ロボット製作で培った知見を生かして医療従事者を支援しようと、自宅でフェイスシールドの製作に着手。医療機関と直接やり取りをしたり、チームの仲間にも参画を働きかけたりすることで、6か月間で2200個を寄付した（詳細は、『VIEW next』高校版2023年4月号で紹介）。

その活動が評価され、20年10月に、世界有数のパソコンメーカーから「世界を変える10人の若い女性」の1人に、日本人として唯一選出された。また、21年には、優秀な若者の研究活動などを支援する孫正義育英財団の第5期生に選ばれた。現在は、小中高生に理科教育の機会を提供する国内企業で働きながら、24年秋からの海外大学進学を目指している。

校内の有志でチームを組み、地域住民と協働しながら、高校生主体の防災教育に取り組む

伊関佳純（いせきかずみ）

福島県に生まれながらも防災に関心を持つことがなかったが、高校1年生の時に参加した、全国の高校生が防災について考えるワークショップで、自分と同じ高校生が、地域の防災のためにできることに取り組んでいることを知った。それをきっかけに防災に関心を持ち、学校の防災教育をよりよいものにしたいと考えるようになったことから、同じ思いを持つ友人と「防災と教育を考える会」を立ち上げた。

同会では、学校の近隣の住民とオリジナルの防災ゲームに取り組む中で「自助・共助・公助」について考えを深めたり、地域住民との町歩きを基に防災計画や防災マップを作成したりした。また、災害発生時に避難所となる校舎を高校生が主体的に運営できるよう、地域のコミュニティーづくりに着目。防災訓練の充実にとどまらず、普段から高校が地域のハブとなり、高校生が多世代と交流して人々をつなぐ役割を果たすことで、みんなが助け合える地域を創りたいと考え、次の活動を模索している。

周囲の期待に応えてきた自分が、病気を契機に「自分」に目を向け、新たな目標を見つける

清水陸志（りくし）

中学校までは、勉強にもスポーツにも一生懸命取り組む模範的な生徒だったが、3年生のある日の朝、突然起きられなくなり、燃え尽き症候群と診断された。登校できない日が多くなり、周囲からは「怠けだ」と言われることもあった。それでも受験勉強を続け、高校に合格。その後、自律神経の不調によって脳への血流が低下し、頭痛や立ちくらみ、失神などが起きる起立性調節障害を患っていることが判明した。

高校では心機一転頑張りたいという本人の意思に反して、入学1か月後には再び登校できなくなり、退学を決意。新たに入学したのが、発達に課題を持つ高校生が特別支援つきの普通教育を受けることができる通信制高校だった。無理のないペースで登校を続ける中、支援員や心理士のサポートもあって次第に体調も回復。自分の病気をきっかけに心理学に興味を持ち、「完璧主義」や「理想からの減点主義」などの自分の思考の癖も自覚した。今後は大学に進学し、心理学を中心に学びを続けたいと考えている。

次ページからは、3人の若者が秋田先生と、創りたい社会とこれからの教育について語り合う

立崎さんとの対話……P.8
伊関さんとの対話……P.10
清水さんとの対話……P.12